

教育委員会 平成20年度1月定例会会議録

平成21年1月14日（水）鎌倉市役所 402会議室

9：30開会、10：30閉会

出席委員 藤原委員長、仲村委員、宮崎委員、林委員、熊代教育長

（会議経過）

藤原委員長 今日は、今年第1回目の開催となるので、これから1年間どうぞよろしくお願ひします。それでは、定足数に達したので、委員会は成立した。これより1月定例会を開会する。本日の会議録署名委員を宮崎委員に願ひする。

日程に従ひ、議事を進める。

<日程第1 報告事項>

藤原委員長 日程第1 報告事項に入る。

1 部長報告

教育総務部長 平成20年市議会12月定例会は12月3日から12月18日まで16日間の会期で行われた。

一般質問は12月3日から8日まで14名の議員から質問があった。教育総務部関連としては8名の議員から質問があり、その概要は次のとおりである。まず、公明党の納所議員から青少年育成の課題や県立神田高校の不合格問題について、かまくら民主の会の山田議員から学校とコミュニティーとの連携について、日本共産党の吉岡議員から就学援助の状況と給食費の値上げについて、民主党鎌倉市議会議員団の早稲田議員から特別支援教育の取組と少人数教育の充実について、無所属の原議員から学習指導要領改訂による教員の授業時間数増への対応、トイレの清掃、国旗・国歌の実施状況、全国学力・学習状況調査について、神奈川ネットワーク運動・鎌倉の三輪議員からオンブズマン制度の導入と青少年の居場所の確保について、かまくら民主の会の久坂議員から子どもを守る安心な環境づくりについて、鎌倉同志会の前川議員から特別支援教育の充実、教員の働く環境の整備、第二中学校・大船中学校の改築問題、保護者と学校との間の問題解決についての質問があった。

続いて12月9日にあった文教常任委員会では、「平成20年度鎌倉市一般会計補正予算のうち教育総務部所管部分」の審議が行われた。また、「小学校給食調理業務の民間委託について」、「玉縄中学校第二グラウンド用地の土地交換について」、「財団法人鎌倉市学校建設公社の今後のあり方について」、「学校給食費の改定について」、「平成20年度全国学力・学習状況調査結果について」、「教育委員会事務局等の組織の見直しについ

て」、「平成20年度教育委員会事務の管理及び執行の状況の点検及び評価について」の以上7件について報告をした。また、小学校6年生まで35人以下学級の実施についての陳情が審議され、これについては、不採択となった。なお、12月18日の本会議では教育総務部に関連する議案は全て可決された。

生涯学習部長 生涯学習部関連の12月定例会の報告をする。一般質問では3人の方の一般質問があり、まず公明党の納所議員から昨年実施した青少年総合意識調査を今後どのように青少年施策に生かしていくのか、また青少年会館の青少年利用の取組について具体的に打ち出していくべきではないか、あるいは玉縄青少年会館の施設を新たにしていこうという構想があるか、更に青少年人口の推移、そして今後の青少年育成のあり方についての質問があった。また、神奈川ネットワーク運動・鎌倉の三輪議員からは、青少年の「健全育成」という言葉における定義についての質問があり、また青少年会館に関する機能のどういった要望があるのか、あるいは青少年の声を把握する電子的なツールの利用、そういったものについての質問もあり、更に青少年の居場所作り、その取組についての質問があった。最後に鎌倉同志会の前川議員からは市内の指定史跡、指定文化財についての質問と、実際に国の指定申請を出して、告示をされ、国の指定史跡に指定されるまでのその流れと、その迅速化についての取組についての質問があった。

文教常任委員会は議案として鐮木清方記念美術館の指定管理者についての説明をして特に質問はなかった。また、一般会計の補正予算についても特段の質問はなかった。報告事項は何点かあって、一点目が鎌倉市の指定有形文化財の指定について報告をして、松中議員から、神仏混合であった時代、八幡宮が寺であったという証について、この指定された文化財については考えて良いのかというような専門的な質問があった。また、これは伝だが、北条時政邸跡という大町六丁目の埋蔵文化財の発掘調査について引き続き松中議員からいくつかの質問がされた。こういった伝承ではあるが、北条時政邸跡と言われるような重要な遺構と思われるところはまだ市内には残っているのかというような質問と遺構の時代的な質問、また北条時政邸と確認できるような成果があったのかという質問がされた。また、民主党の渡邊議員からは、今後、国の指定遺跡に向けて、その取組、また更に指定の、史跡の指定を受け、買収というふうになった場合には、そういう具体的な事務の流れはどうかという質問があった。併せて国や県のその補助制度についての質問があった。更にこの大町六丁目については、公明党の納所議員から、もう少し調査の時代を12世紀ぐらいまでさかのぼりたいけれども、それについてどう考えているのか、更に調査を発展させる可能性があるかという質問があった。最後になるが、先ほど委員会で報告した議案、鐮木清方記念美術館の指定管理者についての議案については、18日の最終本会議で総員の賛成により可決された。

2 課長報告

(1) 平成19年度全国学力・学習状況調査の結果の取扱いについて

教育指導課長 本市の小学校6年生、中学校3年生が参加し実施した「平成19年度全国学力・学習状況調査」の結果について、3件の開示請求が提出され、実施要領及び文部科学省通知に基づき「非開示」を通知したところ、2件について「異議申立書」の提出があった。その2件について、鎌倉市情報公開・個人情報保護審査会に諮問していたが、審査会から11月21日に答申第5号、12月25日に答申第6号が提出された。答申第5号については、11月臨時会にて協議していただき、答申内容を尊重する形で、請求者への公開を実施した。答申第6号については、その内容が第5号と同様であることから、同様の対応をとることとし、1月5日請求者に対して公開を行った。

(2) 幼・保・小連携研修会報告について

教育センター所長 教育センターでは、「豊かな感性を育む」というテーマで、子どもたちが、「生きる喜び・遊ぶ喜び・学ぶ喜び」を感じられる教育実践の研究に努めるとともに、幼稚園・保育園から小学校への円滑な接続ができることを目指して「幼・保・小連携研修会」を年間3回実施した。第1回を6月5日、材木座幼稚園、第2回を10月31日、大船保育園、第3回を11月14日、腰越小学校を会場として実施した。子どもたちの活動の様子を幼稚園・保育園・小学校の教職員並びに保育士、こども部職員等が参観し、それぞれの園及び学校の情報や意見交換を行った。幼・保・小の教育の実際にふれることで、幼児、児童の成長過程を確認し、幼児・児童の育成について共通理解をしたところである。「材木座幼稚園」では、園児のグループ活動の様子を参観した。「大船保育園」では、3歳・4歳・5歳の異年齢園児の歌の活動を参観した後、コミュニケーションや集団遊びについて協議した。「腰越小学校」では、国語の授業の参観後、話し合いのルールや一人ひとりがいかに自分の考えを発表させていくか、具体的場面についての意見交換を行った。

今後も、幼・保・小の連携、交流を推進する中で、それぞれの園及び学校での充実に努めるとともに、子どもたちにとって、幼稚園・保育園から小学校へのより円滑な接続ができ、意欲的で豊かな生活が送れるようにしていきたいと考えている。

(3) 平成21年成人のつどいの開催結果について

青少年課長 「平成21年成人のつどい」については、平成21年1月12日（月）の成人の日に鎌倉芸術館で開催した。教育委員の皆様方におかれては、年始のお忙しい中、ご出席いただき、ありがとうございます。開催に当たっては、市内公立・私立中学校出身者16名の「成人のつどい実行委員会」の司会・進行・運営により、特段の事故などもなく終了することができた。

内容については、第1部の式典では、開式に当たり参加者全員で国歌斉唱を行い、主催者挨拶と来賓の祝辞等で、第2部のアトラクションについては、タレントの「ペナルティ」によるショーと抽選会を実施した。また、中学時代の恩師からメッセージをいただき、20分程度に編集したビデオを放映し、好評を得たところである。「平成21年成人のつどい」の該当者は、1,391人で、参加者は1,031人、参加率は74.1%でした。

参加者を前年に比べると、人数で102人の減、率では6.5ポイントの減でした。なお、式典等の内容については、いろいろなご意見をいただいているが、今後更に工夫を重ね、新成人の意向を反映した式にしていきたいと考えている。

質問・意見

(平成19年度全国学力・学習状況調査の結果の取扱いについて)

林委員 「全国学力・学習状況調査」だが、平成21年度は、実施される予定があるのか。

教育指導課長 文科省においては、実施予定ということで要領等が通知されている。ただ、その参加については各自治体の判断ということになっている。これについても、本市の参加についてのご協議を今後していただく予定であるが、現在、いろいろな各市町等の動向等もあるので、その辺も情報として持った上で、委員を含めて、教育委員会としての考え、意向を確認していく。時期的には迫っているが、今後、そのような中で検討していくということになる。

林委員 一つ、その時にまたお願いがあるのだが、13頁の(2)の一番下のところ、「そもそも実施要領には」のあと、かぎ括弧で書いてあるところだが、「市町村教育委員会が、保護者や地域住民に対して説明責任を果たすため、当該市町村における公立学校全体の結果を公表することについては、それぞれの判断にゆだねること」とあるので、これについてどのように決め、どのように周知していくかということ、あらかじめ検討しておく必要があるのだと感じた。

その件については、提案をいただいて、それについてもんでいく。これをやっておけば、異議申し立ても含めての対応等も明確になってくるように感じている。それについては、是非21年度のディスカッション、議論する時にそういったものの方向性等についても、ご提案いただきたいと思います。

(幼・保・小連携研修会報告について)

林委員 18頁の資料で目的が最初に書いてあるのだが、この研修会の目的ということで、「幼児・児童の実態や諸問題を把握し、幼児教育のあり方について研究を深めることを目的とし」とあるが、この研究を深めることによってどういうことが起きるのか、これは目的ではなく目標ではないかと私は感じたのだが、この目標をつうじて何を達成したいのかをお聞きしたい。

教育センター所長 教育センターでは、幼・保・小と通称言っているが、幼稚園と保育園と小学校の交流をいろいろな形で持っている。今回、この形については、過去は年9回

持っていたのだが、多くの場合、今なかなか日程調整がつきにくいということで、主な活動は、各小学校区の実態の中で近くの幼稚園、保育園と交流をしながら授業参観をしたり、園児が来たりしながら交流をして深めている。今回、この計画をした連携の研修会というのは、教育センターがある程度該当園と相談をして決定した。

この中で今、具体的には、子どもをどこで育てていったらいいか子どもの様子を実際に見ながら、その中で子どもがしている会話、あるいは子どもの動き、そういったことを知ってもらう。今後どういう形で教師なり保育士が子どもを援助していったらいいか考え、日常の活動を工夫、改善していくというので、そういう機会を設けているためである。幼児教育のあり方について考えていくことを全てこの研修会一本でやっているわけではないが、その一助としてこういう活動を組んでいるわけである。たまたま3回とも、幼稚園関係の参加が非常に少ないのだが、今後、1月の末に今度は幼児教育研究協議会を鎌倉生涯学習センターで開催する。これについては、約200人の、幼稚園、保育園、小学校の関係者が集まって、具体的に、子どもの動きなどを見ながら、どういう形で支援していったらいいか、育てていったらいいかということについて、話し合いの場を持っている。

この活動は、今年、31年目になるが、以前は、幼稚園、保育園、小学校の連携がなかなか取れてなくて、それぞれがこういうところが悪いではないかという批判をしていた時代がしばらくあったようである。段々年数を重ねる中でこの連携が取れてきたと考える。

林委員 経緯とかの説明ありがとうございます。目的について教えていただけないか。

教育総務部次長兼教育総務課長 こちらに書いてある「目的とし」という表現が、多分、理解しづらいといえますか、少し違っているのかなと、基本的に幼・保・小の連携の関係については、幼稚園、保育園から小学校にスムーズに移行する、進学して行くということが、基本的な目的ということで進めているので、林委員がおっしゃるとおり深める事については、あくまで目標というふうな理解になるかと思う。

林委員 今のスムーズな移行というのは、目的としておいているということだが、これは、何か文章化されているものがあるのかお聞きしたい。

教育センター所長 今年度4月から幼稚園の教育要領、それから保育指針が、平成21年度の4月から適応ということで、小学校の指導要領については、23年の4月から施行されるが、その中で、それぞれの、幼稚園の場合の指導要領のポイントとして、幼・小の円滑な接続を図るため、規範意識や思考力の芽生えなどに関する指導を充実するとともに、幼・小の連携を推進といった項目がある。また、保育指針についても小学校との連携ということが明文化されている。小学校についても、小学校間、幼稚園、保育所との連携、あるいは交流という形で明文化されていて、そこに基づいていろいろな施策を組んでいるということである。

林委員 その目的等も、是非見たいので、ついでの時でも結構なので、見させていただけ

ればと思う。今後、その目的と研修との間の整合性がちょっと見えにくいと私は感じる。この年間を通じての各研修の目標等について、このような場で報告していただけるか。

教育センター所長 教育センターでは、これに限らず、今年度こういう形で研修なり計画をしていきますということで、年度始めに報告をしているので、その時に申し上げます。

仲村委員 ちょっと質問をはばかれるような質問なのだが、幼稚園と保育園とはどう違うのか。保育園というと、イメージとして幼稚園へ行く前の子どもを預かるというイメージがあるがどうか。

教育センター所長 一つは、幼稚園は、文部科学省の管轄であり、厚生労働省の管轄の中に保育所がある。幼稚園の生活の中で、午前中4時間は子どもが先生方と生活をする。保育園の場合については、朝から夕方まで、保育士の先生と一緒にいる。ただ、最近は、幼稚園の中にも保育所的な意味合いを持たせる形の部分もあるが、そういう形の中で、幼稚園、保育園は機能している。

仲村委員 年齢的にダブるといえるのか、幼稚園児も幼稚園に行かないで保育園に行っている同じ年代の人もいるということか。

教育センター所長 年齢については、3歳、4歳、5歳という形で幼稚園には通っている。ただ、保育園については、0歳から入学前までということで、年齢の幅がある。

仲村委員 幼稚園に行っていない児童は保育園に行っているということか。

教育総務部長 国の所管の問題もあるが、幼稚園は、あくまでも幼児教育ということが目的である。保育園は、これまでは福祉的な観点から、働く親の子どもについて措置をし、バックアップをしていこうという観点から形成されてきたわけだが、最近働く親が非常に多くなったという中で、保育園の中でも教育的な要素がだいぶ強くなってきて、そこで、一つの組織の中で、幼稚園の内容のものと保育園が従来持っていた内容のものを一体してやっっていこうという動きが、幼・保の合体、統合で、今これが進められているところである。従って、保育園の方は、働く親と子どもの保護であるので、福祉的な観点から行われたものである。そういう意味で、保育園の方は0歳児から、幼稚園の方は3歳児からとなっている。

藤原委員長 保育園と幼稚園の機能を持つそれが、「認定子ども園」ということですね。

林委員 先ほど、目標をお聞きしたのだが、その達成度合について、教育センターとしてどうお考えになっているのかを教えてください。

教育センター所長 園児、若しくは小学校の児童について、スムーズに接続していくという達成の度合だが、子どもの様子を見ながらやっていくので、数字的に表すことは難しいと思う。ただ、子どもの様子が、例えば、先生の指示に従ってスムーズに動ける場合と動けない場合が多々ある。その中で、どういう形で幼稚園の生活ぶりをみて小学校側は、どう指導していったらよいか、その辺のところ、こういう手立てをしていったらよいかという形で、指導はそれぞれ考えており、連携をとりながらやっている。また、子どもが小学校に上がってから、何かで困った場合には、幼稚園又は保育園に問い合わせをしながら、どういう形でやったらよいか、接続がスムーズにできるようにやっている。今、そういう形の中で、自分たちが目指す方向について、すっきりという評価がなかなか見えないのだが、とにかく現場の子どもたちは、各園、各学校において違うので、その中で具体的な手立てをとりながら、指導を深めているところであり、なかなかその接続について、ここまでやったからということで、うまい具合の数値についてお示しできないのが現状である。

林委員 質問が悪くって申し訳なかったのだが、先ほど確認した「研究を深めることを目標とし」ということなのだが、その研究がどのように深まったのかの評価をお聞きしたい。

教育センター所長 接続については、年間いろいろな形の中で研究を深めている。今年の場合については、言葉ということに視点をおいて、いろいろな児童を見ていて、その中で親の言葉かけ、それから園児に対する家庭での言葉かけ、そういう形について、こういうところを注意したら良いのではないかという形が見えてきたので、それについては、この連携研修会でなく、幼児教育をまとめた大きなものの中で報告をし、3月段階でまとめ、年度当初に、各園、各学校に配布して、こういう形で指導に当たっていったら良いのではないかということは、示していきたいと考えている。

林委員 研究協議の中にその文言が見受けられないのだが、どこに書いてあるのか教えてほしい。

教育センター所長 研究協議については、事業を見ながら、具体的な質問等が出たのをある程度ピックアップして載せたものである。幼・保・小の連携研修会というのは、たった3回のみで、成果を見ていくという形でなく、いろいろな形でやっているのも全て委員がおっしゃったような形の中で回数を重ねながら、どのようにしていったら良いのか、子どもの様子を見ながらやっているが、具体的には、この中では、明確な到達点まで行くような文言のやり取りがないかもしれない。各保育士あるいは教師が子どもたちの活動を見ながら、どういう形で接していったら良いのか、指導の参考にはなったかなと思う。

林委員 ここから意見だが、年間を通しての目的があるのであれば、各研修についてもそ

の目的に沿った形で目標を設置して、年間を通じてやるべきだと思う。言葉とかを取り扱うのであれば、その形にあった内容の、この研修についても目標を設定してそれを協議するとかというのも必要だと思う。回数が少なくなっているのであればあるほど、それをきちんと1回、1回の開催目標とかを含めて線になってつながっていることが必要だと思う。それが行政効率を上げることにつながると思うので、各回の目標を明確にして、年間を通じての目的も把握した上で、研修計画等を立てていただきたい。

藤原委員長 私も何回か、こちらに参加させていただいて、立場が違う熱心な先生方がそれぞれ実体験をされながら、いろいろな思いを抱かれて帰って、傍目で見ているとすごく成果が上がっているという感じがした。ただ、私も先ほどの意見と同じだが、この報告書を見て、いいことは書いてあるが、むしろ、その問題点をこの協議の中で、例えば、困った点とか、お互いの立場に対する要望だとか、改善点とかの話があったかどうか、そういう議事録みたいなものがあるのかどうかをお尋ねしたい。

教育センター所長 スムーズな点ではなく、不安とか、疑問とか、そういうことについては、いつもこの会では語られる。例えば、幼稚園、保育園の先生方が、具体的に、実際に小学校の現場をご覧になっていない場合、例えば、親から相談を受けなければならない、給食はどうしているのか、ちゃんと食べられるのだろうかとか、アレルギーの対応については、幼稚園、保育園ではこういう対応をしているのだが小学校ではきちんとやってくれるのだろうか。今、現実、その接続の中で、小学校に上がった時に、そうした対応がしっかりと小学校でもキープできるかという質問はいろいろな場面で多い。それから、ひらがなが書けなければいけないとか、読めなければいけないとか、そういう具体的な、子どもの立場に立った親の質問等もある。その中で小学校ではどういう対応をしていったらいいのか、そういう不安については、このようにするというのをこの中で議論をしている。

藤原委員長 私が考えたのは、お互いの立場を実体験で把握するという意味では、これで成果が上がっていると思うが、ただ、今後、幼・保・小を推進して行くに当たっては、幼・保・小の共通した子ども観がないと、段差があるつながりになってしまい、うまく連携が取れていかないと思う。表面的な、もちろん日常的なことでも、驚きだとか、改善点だとか不安解消とかということには、もちろんつながっていくが、その他にやはり共通の子ども像、それから例えば、出来るなら共通の幼・保・小のカリキュラム、そういうことまで突き詰めていかないと、この会がただ開いて終わっていくというようになってしまうのではないかと思う。というのは、やはり鎌倉の実態は完全には把握していないが、小一プロブレムという問題もある。それが幼稚園の問題か、それとも、家庭の教育力の問題か、それは両方関わっていると思うが、そういうことも含めて、小一プロブ

レムの解決のために、例えば幼稚園の保護者も、事前に就学前に小学校の様子を、保護者が見て下さるとか、もっと積極的な取組をこの幼・保・小ではしていった方がいいのではないかという気がする。やはり就学前の規範意識やルール作りとか、基本的な生活習慣ということは、小学校の先生はもちろん望めないことだし、幼稚園、家庭教育で充実していかなければならない問題なわけであるから、その辺をもっと掘り下げて、お互いにそういうことを起こさないためにはどうすればいいのかというような突っ込んだ話をするには、やはりこの人数では少ないと思う。もちろん小学校区の中での保育園、幼稚園との取組ということで、3、4回から10回やっているところもあると聞いたが、その辺の中で、どのような意見が出されているのかもちょっと興味があるのだがいかがか。

教育センター所長 幼・保・小プロブレムの問題については、いろいろな形で幼・保・小の職員が集まった時に話題になる事の一つである。例えば遊びということを切り口にとっても、これについては、だいぶ前に話題になったゲーム等で具体的に子どもが個々で遊んでいるが、子どもは群れて遊んでいないと、そういった部分で大人がどう対応していったらいいかということについても話が出たし、それから、言葉についても、今、テレビ等でいろいろなコマーシャル等の真似をして、それで子どもとのやりとりがなされていると、その中では、親も、要するに子どもが何かしゃべったことを笑うという形で、おもしろがっているが、本当に子どもが言葉を大事にこれから使っていくということについて家庭で言うと親が育てていない現状というものも、いくつか報告されている。そうした中で、幼稚園は幼稚園、保育園は保育園、小学校は小学校で、言葉ということに関しては、それぞれの親との会があるので、話し合いを持ちますが、職員だけではどうしても連携がとれないので、その背後にいる親を言い方はきついですけれども、巻き込んでというか、それに参加をしていただいて話し合うということ、それは今増えているので、今後それも支援していこうと考えている。

熊代教育長 珍しくこの幼・保・小の連携についての話し合いが、これだけ出来たなと思って、私はうれしく思っているのだが、実は、これは大変なことである。冒頭で、所長が31年前と言った。昭和52年に、県下で初めて幼・保・小の連携を打ち出したのが、鎌倉である。それから約30数年経っているわけだが、文科省がようやくそこに気づいたのは、まだここ6、7年である。幼稚園、保育園、学校、この3者の連携を国の段階で何とかしなければいけないと、今の子どもの現状を考えると、学校だけ、幼稚園だけ、保育園だけでは、今後どうにもならないだろうということで、ようやく気づき始めたのが、6、7年前である。鎌倉は、すでに30年前から、その点に気がついていて、これに取り組んできたわけである。今、実は、小学校は小学校だけ、幼稚園は幼稚園、保育園は保育園で、お互いに幼稚園の先生、あるいは保育園の保育士、小学校の先生が、

何を、それぞれでやっても全く判らなかつたわけである。こういうのを立ち上げたこと
によって、幼稚園の先生は、「あ、小学校の低学年というのは、こういうことをやっている
のだな」と、あるいは保育園は保育園で、「幼稚園では、こういうことをやっているん
だな」というのがようやく解り始めた。今、質問に出ていたように、まだ、それだけやっ
ていても完全とは言えないのである。ということは、どういうことかと言うと、家庭教
育のあり方も、それぞれの家庭によって教育の仕方が違っている。例えば、学校ではこ
うですよと言っても、大昔であれば、各家庭は、「学校がこういうことをやっているのだ
から、それに従おう」という家庭が圧倒的に多かったのだが、今は全く逆になっている現
状がある。例えば、子どもが学校で、たまたま何か悪いことをして、先生が怒る。昔の
子どもは、学校で先生に怒られてしまったということを家に帰って親にあまり言わなかつ
た。今の子どもは、家に帰って先生にこんなことやって怒られちゃったと意外と言っ
ている。昔の親であれば何にも言わなかつたのだが、今の親は、学校に来て、「何故、う
ちの子はそういう程度で怒られるのか」という抗議を申し入れる親が、かなり出てきてい
るわけである。そこにやはり家庭教育、あるいは地域の教育、そして学校教育、この三
者がお互いに理解し合いながら教育を進めて行かなければならないだろうというような
連携のあり方を、今、国も地方も一緒になって求めているわけである。なかなかそのあ
たりが、まだ、私は、スムーズにはいってないだろうというように思っている。今後、
更にこのあたりを綿密な計画をたてながらやっていかないと、ただそういう連携、連携
という言葉だけが先走ってしまって、内容が伴ってこないというような結果になってし
まうのだろうと思っている。

今回、学校教育法の改正によって、幼稚園や学校とは何か、それは学校教育法の第一
条の中に規定されている。今度は幼稚園を一番前にもってきたわけである。今まで幼稚
園というのは一番最後だった。小学校、中学校、高等学校、大学、一番最後に幼稚園が
あったのだが、幼稚園を一番前にもってきて、幼稚園、小学校、中学校に、何故したか
と言うと、それほどやはり幼稚園教育というのも大事なんだよということを文科省が初
めてここで打ち出しているわけである。ある意味では、幼・保・小の連携の元年とい
うような位置づけで、今後、見ていかないと、内容をもっと濃くしていかないと、ただ、
ただらとした内容で終始してしまうというところもあるので、もう鎌倉の地盤はしっ
かりと固定しているので、この上に更に内容の充実を期して幼・保・小の連携教育をや
っていかねばいけないのではないかなというふうに思っている。今までおろそかに
されていた部分がようやく表に出て来たというところで、私はこれに大いに期待しなが
ら、やがて、わかってくれる時代が来るかなと思っている。

これだけやっても、成人式で一番前に並んだ人たちが「わあ、わあ」騒いでいたの
で、まだまだ十分な連携が取れてないのかなという感じをした。

での、今の教育長のお話があって、認識を新たにしなければいけないと思った。私は、やはり幼児教育で、普段、一番感じるのは、「しつけ」の問題だというふうに思っている。この連携の中で、今、連携しながら何をやるかという内容が問題だという話でした。全くそのとおりで、そういう意味では、年間計画を教育センターの方でも、毎年作っているというお話で、09年度の計画をどういうふうに組み立てられるのかわからないが、総花的に、あれも、これもというのも大事だと思うが、その中で、何かもっと絞り込んでやっていく必要があるのではないかと思う。絞り込む中では、やはり、私は、今、教育には様々な問題があるが、原点をたどれば、この「しつけ」に必ず行き着くと思っている。先ほど教育センター所長からお話があって、保育園の場合は0歳児から預かり、幼稚園は三歳からということだが、「しつけ」という意味では、年齢的に最も大事なものは幼児たちだと思う。

家庭との関係があるので、どういう方針、方法でやるかというそのへんは、保護者というか、母親ですね、今は、「しつけ」をするのは母も父もないかもしれないが、特に、母親のウエイトが大きいのだろうと思う。その辺の意見をしっかり聞いて、やり過ぎてもいけないし、これはあまり及び腰になってもいけないという問題があるかと思うが、前向きに考えていただいて、何を保育園ではやっていただきたいのかははっきりさせる。ただ、基本は我が家でやるというふうな意見のすり合わせみたいなものが必要だろう。それから母親の考え方が浅いとか、足りない部分もあるかもしれない。話は飛びますが、「モンスターペアレント」のことなんか、考えるとあるわけで、その辺をやはり認識を改めてもらわなければいけない。それはやはり、様々な話し合いをする中から、そういうチャンスをつかんでもらうということになるかと思うので、そういったことも活用しながら、母親の意見あるいはその家庭のと言った方がいいかもしれないが、保育園の保育に何を望むのか、幼稚園の教育に何を望むのかというものを、今一度、「しつけ」ということをベースにおいて、見直してみる必要があるのではないかと考えている。これは単年度の目標であるはずがない。かなり長期的にやらなければいけないし、それから鎌倉では、教育長のお話のように、国に先がけてこの連携の研究をしているということなので、そういう家庭との、例えば、「しつけ」の連携をどうとるかという、そういうことで、あるべき形というものを作りあげるといふ先行自治体としての実績を活かす場があるのではないかというふうに思う。

是非、「しつけ」について、基本的に考えている重要なテーマの一つだと思うが、より突っ込んで、より具体的に取り組んでいただきたいというふうに思う。「しつけ」は、同時に、これはコミュニケーションだし、それからさっき言葉の話があったが、私は、その話すという、前にお話したことがあるかもしれないが、アメリカの教育思想家でジョン・デューイについて、皆さんデューイの本は、教育委員会の皆さんであれば、若い頃から読んでいらっしゃるかもしれませんが、話すことは、とにかくその本能であると言っている。子どもは、特に、何か新しいものを見聞きした時に親に話したがる。「お母さ

ん、ねえ。」「お父さん、ねえ」と言って話したがるといふのを思い出すわけだが、そういう本能をいかした話す機会を日常的に子どもたちに植え付けてゆくという、そこら当たりも幼稚園の教育という点からでは、とても具体的な目標となりうると思うし、それから保育園でも同じように、それは位置付けてもいいテーマだろうというふうに思う。

コミュニケーションの中では、どういうふうに譲るかとか、どういうふうにけんかしたらほどほどのところで譲り合うとか、もし殴り合いになったら、ほどほどのところで収めるとか、そんなところも体験をしながら学んでいこうと思うが、そういったことをうまく仕向けるというか、指導しながら、良い体験をさせていかなければいけないのだと思う。だから、教えることはたくさんあるだろうが、やはり、どのような「しつけ」をするのか、本当は、きわめて基本的なことの「しつけ」は家庭でなされなければならないと思う。様々、社会状況、家庭状況が、時代と共に変わってきている。家庭が、保育園なり幼稚園に頼むという「しつけ」の部分も、以前よりは増えてきているというふうに言ってもいいと思うのだが、そういった背景を踏まえて、具体的な取組、どのように取り組むかという、その具体策を考えていっていただきたいというふうに思う。

藤原委員長 私も、今のお話で具体的な方策を考えていくという意味で、小学校から中学校への連携というのも、とても、今、問題になっている。段差の解消っていうことで、小・中一貫教育という提案もなされているけれど、そういう意味では、やはり幼稚園から小学校へ上がるというのも、すごい大きな段差だと思う。その幼・保・小、それから保護者が連携、どういう子ども像を作りたいかという、その連携をとっていくという意味で、やはり小学校の先生、それから幼稚園、保育園の先生が、違った場に、一日、例えば、小学校の先生が保育園に行き、一日、保育を担当してみられるとか、それから保育士が小学校へ行き、小学校での一日、先生と共に授業を見たり、補助したりといったふうに実際にやっていただいて、体験していただくということが、一つの大きな先生方の力になるのではないかなと思う。時間の問題とか、いろいろあると思うが、そういうことも、今後、必要になってくるのではないかなという気がするが、いかがか。

教育センター所長 今、「しつけ」の問題が話に出たが、「しつけ」の問題はやはり、要するにコミュニケーションの部分の話が出たが、同じだと考えている。やはり、言葉とか会話とかコミュニケーション、いろいろな言葉があるが、やはり相対的に、家庭での子どもの会話のレベルが、結構落ちているように思う。例えば、親が子どもを注意しても、どういう言葉が返ってくるかっていうと、子どもさんからは「そんなの関係ねえ」という言葉が、幼稚園とか保育園でも返ると聞いている。つまりコマーシャル等で出てきた言葉を使って、親が注意したことについて、子どもは返すと。それとまた、教育センターでは5年ごとにアンケートというデータを取ってるが、その中でやはり明らかに出てきたのは、「これこれのことについて、親が子どもに言い聞かせることができるか」とい

うことを言った時に、その率がかなり5年ごとに下がっている。つまり、子どもが言うことをきかないという言い方もできるが、親が子どもに言うことを聞かせる力も弱まっているという見方もできるかと思う。その辺のことは、やはり親も含まれた中で連携をとっていくということが、職員だけでなく重要なことだと思っている。

それから今、保育体験については、多くの初任者が、夏休み中に社会体験として保育園に入って研修を積んでいる。そして、学校にまた9月に戻って来る。そういう体験を今も現実に行っている。

(平成21年成人のつどいの開催結果について) な し

(報告事項は了承された)

(2) 行事予定 (平成21年1月10日～平成21年2月9日)

行事予定報告に対する質問・意見 な し

(行事予定報告はそれぞれ了承された。)

藤原委員長 本日の日程は、すべて終了した。1月定例会を閉会する。